

岩崎 (イワサイ) の民話について

上谷 俊道

小生が子供の頃には、『もらい風呂』とって、我が家が風呂をたくと、だれかれ無しに夜風呂入りに訪れ、囲炉裏の間で夜遅くまで、お茶を啜りながら、あるいは、冬ともなれば、藁仕事だの、紙縫り作りから始まるキセル入れ作りだのと、昼間から夜遅くまで、入れ替わり立ち代り村人が訪れて来て、手を休めた時に、いろんなことを話して聞かせてくれたことを覚えています。『さて、その内容は、・・・・。』となると、何も思い出せない。

岩崎の代表的な民話は、八鹿町編纂の『八鹿町の民話』に収められている『ハッサクの由来』が有名であるが、今のうちに、区民に教えてもらおうととりあえず集めたものを、記録しておく。教えてもらおうと、糸の端を見つけた如く思い出せるのは、老いたるかなと悲しくもある。

急ぎ留めることに重きを置いたことから、入力ミス等々は承知の上である。

岩崎の昔話

上谷俊道

はじめに

私が子供の頃と言っても、それは第二次大戦終戦の前後には、雪の日には炬辺や炬燵で、いろんな事を聞いた記憶がある。家族からだけでなく、村の年寄りや大人から事有る毎に、本当に多くのことを聴いた。子供はその総ての事を、吸収し知識としたのであると今考えている。別の言い方をすれば、三口で生まれた子供は、親の与える食べ物、その食べ物の殆どが集落の地で取れたものであり、家族や集落の人達から、事の善し悪しに関わらず、見聞する事総てを知識として吸収し、成長するものだといえると考えます。だから、当時の子供は、肉体的には、集落の土壌を構成する成分を摂取する事で成長した事になり、精神的には、家族や集落の人達から人間としての基礎知識を吸収し、取り巻く自然に接して人間形成に役立てた事ではと考えます。

だから、かつては語り伝えられていた昔話を聞く事は、そう言う幼少年期の人間形成に大きな役割の一端を担っていたのではないかと考えます。すなわち、地区の文化であると考えるためばかりではないが、かつて聞いた多くのことを書き留めておく事も決して無駄ではないのではという気持ちもあつて、思い出すものの、総て忘れていた事に気付く、集落の者をお願いして、思い出していただく事としたところ、ある者により書き留めていただくことが出来た。

頂戴した内容をつぶさに読ませていただき、骨子を損なうことなく、物語として構成したものを今回一回目として整理した。

今後更に、地区の方々にお願いする事を繰り返し、多くを収集したいと考えています。それは、昔話にとどまらず、衣食住に涉つて取り組みたいものと考えています。

考えると、岩崎のような寒村や山村が古来の日本を伝承し守り続けているのが現状であり、今の都市はアメリカナイズされていて、決して日本の文化や風習は、更に言えば、日本人としての感性すら、消えかけているので、今こそ、岩崎のような所が、振り返り、書き留めるだけでなく、伝えることの必要性を自らが痛感し、実行しなければならないのではないかと思うのであります。

平成17年春 記

岩崎昔話①

『西谷』と『肘が森』地名の由来

今は昔、語り継がれて何時の頃のことか誰も知る者は有りません。それほどに昔のことだそうです。

当時の岩崎村は、出石の「暮坂」に出る出石街道と本奥を通り「榎見」に抜ける山道が有りました。

ある年の暮れの、屋過ぎから降り始めた『みそた』は薄暗くなっても降り続けた日の事だそうです。夕方の晩飯の支度の煙が家々から昇り始めた頃、見るからにみすばらしい格好の年寄りの男が、ある家の戸を叩きました。

『出石に、どうしても行かねばならぬのですが、途中休みもせず急ぎに急ぎましたが、年寄りの脚のこと、やつの事で此処まで迎り着きました。雪交じりの雨の中、今からでは、峠はとでも越せそうにもありません。道も承知いたして居りません。何卒、一夜の宿をお願い出来ないものかと、お願いに参りました。どうか、一夜の宿をお願いいたします。』

手には、どこかで拾ったのであろう杖代わりの木の枝、足元には擦り切れた『草鞋』、端の擦り切れた裾と袂、荒縄の腰紐、背中には小さな包み、対応に出た家の主は、嘗め回すように老人を視て、言いました。

『ああ、そうかい。でも、家には、泊めてやるところはないぜ。……』

『いえ、いえ、火の傍などと申すものではありません。雨風が凄ければ宜しいのです。この土間の端でよろしゅうございます。何とか、お願いいたします。』と何度も何度も、もともと曲がった腰を更に曲げて、頼み込みました。主は、腹も空いていましたし、飯の用意が出来たから早く食べるという催促の声も有ったので、しぶしぶ、

『ああ、判った。そこで良いのなら、……』と言つて、飯を食う為に、囲炉裏の明かりのする部屋に消えて行きました。

其の頃の家は入り口の戸を入ると、『三和土』の土間があり、村では、其処を「庭」と呼んでいました。その片隅には、必ず、藁打ちの為の丸い石が埋め込んであり、冬には藁仕事の為の藁がそばに積んでありました。

旅の途中と言う老人は、主が板戸を勢いよく閉めて去った後も何度もお辞儀をした後、暗い庭にポツンと佇んでいました。板戸の隙間からの僅かな明かりが庭にこぼれていました。目が慣れると、狭い庭でしたが、辺りを見回すと、先程の藁打ち石が黒く光って見え、其の手前には、端々がほつれかけた錠が置

いてあり、其の傍には、磨り減った「槌」が転がっております。昼間、藁仕事の為の藁打ちでもしていたのでしよう。更に、その右手には、数束の稲藁が無造作に積まれていました。老人は其の稲藁に寄りかかり腰を下ろしました。やつと、安堵したのか、ほっと一息つくど、眠り込んでしまいました。よほど疲れていたのでしよう。板戸の隙間からは食後の家族の話声と囲炉裏の明かりが庭に漏れていました。

やがて屋外は『みそた』が雪に変わり、村は一段と静まりかえり、夜は更けて行きましたが、囲炉裏の傍の者達は、老人を泊めたことも、又居ることも忘れただかのように、話し込んで居たそうです。

雪が止んで風の音がし始めてのは夜も可なり更けた頃でした。しばらくして、家の主は風の音の中に異様な物音が混じるのに気付きました。チャリン、チャリンと土間の方から聞こえるでは有りませんか。

「なんだ、あの音は。いい音色だぞ。もしかして、……。」主は一度だけ聞かせてもらったことある、あの心地よい音色を思い出していたのです。小判の音色と同じ音色なのです。主は、板戸の隙間から、覗いて見ました。薄暗い庭の向こうで、キラリと黄金色が動いた。更に目を凝らすと、風呂敷を土間に広げ、老人が敷を敷いているではありませんか。風呂敷にも沢山光っています。主の驚きは囲炉裏の灰をかき混ぜながらも、家の者には、何も言いませんでした。

やがて風の音も消え村の夜はいつものように寝静まり、そして静かないつもどおりの朝を迎えました。

旅の老人は、家人が起きてくるのを待つて居たかのように、囲炉裏の間に向かつて、言いました。

『真に有り難うございました。幸いにも、あなた様のお陰で、寒さを凌ぎ、ゆつくりと眠る事も叶いました。あなた様のお陰でございませう。真に有り難うございました。御恩に感じます。……。』

『……。』

『つきましては、厚かましいことですが、出石に抜ける道を知りませんので、出来れば、途中まで案内をお願い出来ないでしょうか。……。』

『昨夜の雪は降ったというほどでもないし、ひと照りすれば溶ける。越えるのに時間はかからんよ。……。そうかい。途中までならええだよ。』

主の頭の中で、あの音色と輝きが蘇り、ある計画が浮かびました。それは一瞬の間のことでした。「途中までは送つてやる。暮坂向きはだめだ。「槓見」越えが良い。そして、……。」けれども、朝飯を食べろとは言いませんでした。

「昨夜の晩飯も食つておらんし……。弱っているに違いないワイ……。」

昨夜の天候が嘘のような朝日に、薄く積もつた雪はすっかり溶け、主は何故

か腰に「手よき」を差し、二人は本奥に向けて出発しました。途中で二人がどんな会話をしたのか知りませんが、途中で何があったかの、知りませんが、其の日案内した主は、夕方になっても家に帰ってきませんでした。

村では昨日の夕方に、そんな旅人を見かけた者は居りませんでしたし、ましてや村に泊まっていたとは誰も知らなかったので、主が帰らないということで、村は大騒ぎになりました。もつと先まで案内して行つたのではないか、と言う者もありましたが、相談の結果、一晩待つて、今夜帰らなかったら、明日は「山探し」をしようということになったのです。

寝ずの一夜が過ぎましたが、結局主は帰ってきませんでした。行き先は判つていたので、一団は「本奥」に向かつて進みました。ところが、だいぶ進んだ処で、頭と右手の無い死体が道端で見付かったのです。着ていた着物と落ちていた「手よき」で本人だと、すぐ判りました。辺りには血の跡は一つも無く、何処を探しても頭と右手が見付かりませんでした。村人は総出で、引き続き「野探し」しました。更に翌日も引き続き、「山探し」を村人は総出でしましたが、どうしても、見つかりませんでした。

やがて、大江や坂本にも其の噂は伝わり、「山探し」に協力してくれたそうです。やがて、右腕が見つかり、別の谷で右手が見つかりましたが、どうしても、頭が見付かりません。それから探す場所は大江や坂本の集落の山へと広がりました。そして、大江の村人が頭を大江で見つけたのです。

その後、村々は落ち着くと、誰彼となく、旅の老人について憶測しましたが、『一夜の宿を承知した主は、旅人の懐を心卑しくも狙つた。もともと心貧しき者であつた事は、庭に放り出し、飯も食わさなかつたことを見れば判る。背後から「手よき」で襲い掛かつたのであろうが、返り討ちにあつたに相違ない。しかも、血の一滴も無かつた。しかも、頭や手の飛びようを考えると、あのよきな事が出来るのは、神様に他に無いだろう。違いない。』
ということに落ち着いたそうです。

そして、其の教訓を忘れない為、岩崎では、右肘が見付かつた所を「肘が森」、右手の部分を見つけた谷を「西谷」と呼ぶ事にしたそうです。また、大江では、頭の見付かつた場所を「地神さん」として小さな祠を作り祭つたそうです。いまでもその名前や地神さんは残つています。

以上

〔後記〕

街道筋ならではの断であると思ひますし、心広く思いやりの心を先人は伝え聞き、養つたのでしよう、囲炉裏の側で年寄りから、干し柿でも食べながら。

岩崎昔話

②坂の狐

出石街道は岩崎を抜けて暮坂を通り出石へ続いていた頃の、多くの往來が有った頃の昔、むかしのことです。

坂は昭和の中頃もリヤカーを曳いて、出石まで出掛けたり、初午と言え、歩いて坂を越えていました。当時、其の峠を「坂」と言っていたのですが、其の名残で近辺を「坂」と、今でも呼んでいます。

其の坂は当時たくさんの方が行き来していましたが、そこを通る旅人も一匹の狐に困り果てていたそうです。とても頭の良い狐だったそうで、役人も手を焼いていたのです。でも、長い間どうする事も出来なかつたそうです。

「坂」は小さな峠ですが、夕方に峠を通り掛ると、決まって、きれいな娘に声を掛けられ、つい、その気になって、旅人も村人も騙されたのだそうです。旅人も困る。暮坂の人達も、岩崎の人達も騙された人を迎えては困ったのです。誰もが良い知恵が無く困っていたのです。皆困り果てていたのです。

ある秋の夜、囲炉裏を囲んで、岩崎の村人は話し合いをしました。役所からの相談もあり、何とかしなければと考えていたからです。狐退治の話し合いは、良い知恵の出ないまま時間ばかり過ぎてゆきました。やがて、外は「雪越し」が吹き始め、囲炉裏の炎が隙間風に揺れ、煙があちこちに変わる度に、むせこんだ咳が部屋に響きました。そんな時です。

『俺がやってみる。「コガス袋」を一つ用意して欲しい。これから行ってくる。』声の主は一人のとても頓智のあると定評の男でした。良からうと決まり、男は「コガス袋」を持って、そそくさと月明かりの風の中に出掛けて行きました。

男が坂に差し掛かると、ずっと前の方に、小さな提灯の明かりが蛇の目傘の影にして、ゆつくりと歩いて行くのが見えました。男が急いで迫り着き、横目で見ると、蛇の目の主は目鼻立ちの整った若い娘でした。

『何処までお行きですか。』男が来るのを振り返り立ち止まっていた娘は、息を切らして近付いて来た男に、娘は待っていたかのように声を掛けて来た。男は、しめた！と、思った。

『否な、急用で出石に行くのだが、月明かりとはいえ夜道で難儀している。』

『あらまあ、丁度良かった。私も出石に帰るところ、話し相手もなんですけど、お供しましょう。』と、来たのです。男は、尚更、しめた！と、手を握り締めた。

『月夜に蛇の目とは、乙じやあないか。』

『大きな袋に好い匂いの物をたくさん持って、．．．』

等と、ゆつくり歩く蛇の目の娘の歩調に合わせ、止め処も無い会話をしていた

のですが、やはり大きな尻尾は見えないでした。

『先程から視てると、やっぱり何だか、お前さんはとっても上手だが、隠せねえ処が、おめえさん達には有るということをお前さんたちはご存知ねえようだ。皆さんおんなじだぜ。そこを隠せねえようじゃあなあ、…………。』

『…………。』あら何よと、言いたげに、娘は男の顔を覗き込んできた。

『ほら、お前さんも気が付いて無いだらうが、…………。』

『あら、有りもしない可笑しな事を、なによ、…………。』

『頭は良くても無理も無い。そうだらうて。教えたくは無いが、お前さんは別嬪だし、かわいいから教えてもやってもいいぞ、…………。俺の話の聞いたら、間違いなく、お前さんは恥ずかしくて、顔を真赤にして、化粧が落ちてしまつてみつともなくなるに決まっている。そんな顔を俺に見られたくないだらう。だから、この袋に顔を突っ込んで俺の話の聞きな。そしたら教えてやっても良い。きつと役に立つこと、間違い無しだ。』

娘は何を言っているのか判らず、ただ知りたいが一心で立ち止まり、大きな「コガス袋」を頭に被りました。

『俺はなんと言うか、若いうちから、村を飛び出し、旅を続けた。大きな町にも住んだ。此処よりも、もつと山奥で樵をしたこともある。街道という街道を回つた。国中の峠という峠を越えた。野宿もした。いろんな動物にも会つた、…………。ああ、顔はきちんと隠しとくことだ、…………。』

『もつと深くですか、…………。』袋の中からもつちを向いて言った。

『ああ、そのほうが恥ずかしく無くていいと思うよ。』

娘は素直に深く被つた。

『そうだそのくらいだ、…………。特に多く会つたのは、狐だな。伊勢、桑名、出雲、又、未だ他にもある、…………。でだ、大親分と言われる狐も、皆お前さんと同じだ。』と男は言いながら、傘を放り出し、袋を被るように突つ立つて聞き入っているのを見届けると、袋の裾を、両手で勢い良く引き摺り下ろし、娘を突き倒して、袋に押し込み、急いで袋の口を縛りながら、

『…………。化けても、狐はどいつもこいつも、尻尾を隠すのを忘れとるんだよ。背中を調べる事を忘れてるつてことだよ。』転がつて、もがいている袋に男は言い放ちました。

集会所ではお茶を啜りながら、世間話が弾んだり、どうせ騙されて帰つてくのが落ちかも知れないなどと、当ての無い会話が續いていた。風は幾分穏やかになつたように思われました。

突然、戸が開き、男が大きく膨らんだ「コガス袋」をかついで入つて来ました。

『捕まえたぞ。焼いて食うか。どうするか決めてくれ。……』

『……』

『捕まえたのか、……』

『ああ、思ったよりも簡単だった。……』

袋は囲炉裏の傍に吊らされものですから、狐は煙たくて堪りません。袋の中で、気が狂わんばかりに、もたえ苦しみました。殺せ。殺して埋める。肉は臭くて食べねえぞ。いろんな意見が出されました。

しかし、

『食うもよかろう。首巻も欲しいと思っていた。だがな、狐にも言い分はあるう。どういう了見だったのかを聞いてからにしたらどうだ。』

長老の一言で決まりました。

狐は煙で目を赤くして涙を流しながら、親無しに成った経緯、親なし子の惨めな子供時代などの身の上の話を、袋から出され、後ろ手に縛られて、みんなの前に座らされ、ポロポロと大粒の涙ながら、坂で騙しを始めた経緯や日々の生活を話したそうです。村人は話を聞くうちに、嘘でないぞと思う節があることに気付いていました。坂で昔二匹の狐が鉄砲で獲れた事、その後、小さな瘦せた子狐を昼間でも良く見かけられたことなどです。本当のことを話していると思ひ、狐を信じようという気持ちで村人の全員に生まれたのです。

『鉄砲は人の仕業。狐も以後慎むとのこと。よつて、我々も以後心し、無罪放免とするが、くれぐれも二度と、あのような生活は謹まれよ。我々近隣の村人も、悪き行いをする獣は戒めるものの、いずれにも暖かく目をかける事はこれまでどおり続けよう。』

長老が村人を代表して若い狐を諭して、放つと共に、村人は一同改めて誓いました。狐は何なども何度も入り口の敷居の外で手を着き、頭を下げてから、去っていったそうです。その夜遅く、遠くの山の尾根の方から、ことのほか甲高い狐の声が一回だけしたと翌朝村で噂になりました。

『あれは、狐の礼の声じゃよ。畜生と侮りなざるな。』

ある年寄がさう言ったそうです。

「坂」を通る旅人は、未永く続いたとのことですが、今でも多くの狐を見かけますが騙す事は二度とないことが続いているとの事です。そればかりか、私の家では、明治の終わり頃から昭和の始めの頃までの長い間、出産期になると、二匹の狐が訪れ床下で出産し、三度の食事の支度が始まると炊事場の戸の前にチョコーンと座って、餌を待つ毎日が続いたそうです。日が経ち、山へ帰る前日の夕方には、初めて子供を交えた全員が戸の前に並ぶんだそうです。翌朝には、決まって、戸の前に、一枚の完全な「蝮の皮」が置いて在ったそうです。蝮の

脱皮した皮は珍しく、なかなか目にすることは出来ませんでしたし、その皮が毎年貯まるので、当家の先々代は裏の池の縁の大きな枝垂れ柳の杖に小さな祠を作り、長く祀ったそうですが、二次大戦とその後の動乱で、生活に終われる中、柳は枯れ、祠は朽ち果てて今は面影すらありませんが、そのように聞いて言いました。

〔あとがき〕

この話は区民から聞き及んだものを土台に、構成したものです。ですが、教えであろう部分は、作る事をしませんでした。自然と付き合う上での一つの指針を示していると思われれます。動物と言えども、讀せば判つてくれると言っているのでしょうか。

蛇足

出石街道にあった断の中の坂は正しくは「のぼり坂」と言い、秀吉軍の但馬攻めでの宮田での指示にある『のぼり坂に至らず、出石に赴け。』の「のぼり坂」のことである。最も最短コースを避けた根拠は不明であるが、千人の兵を抱えた軍の通過が無かつた岩崎としては、兵糧米の一目分の五石と兵役を免れたことを当時は大いに喜んだことであろうと思う。

岩崎昔話

③狐のご馳走

今では、もう昔のことで、何時の頃の話なのか判らなくなりましたが、この話はかつてはたびたび起こった話なのだそうです。今でもひよつとしたら起こるかもしれませんから、皆さんも気を付けてくださいよ。

昔々の、ある日の夕方、子供たちが村のはずれの森の傍の畑で遊んでいると、それはきれいな知らない女の人が通りかかつて言いました。

『皆、元気いいわね。その遊びは何で言うの。私にも教えてくれない？』といながら、近づいて来て、

『これ、お食べ。』と言って、菓子を一個づつ、全員に呉れました。

『さあ、おいしいわよ。食べてもらんよ。そして教えてちょうだいな。』と食べて見せたのです。子供達は一口食べたら、その菓子は食べた事も無いほど、甘くておいしかったのです。ですから、遊びの名前や遊び方を事細かに、しぐさで示しながら、夢中で説明しました。誰もが一所懸命に話していたので、時の経つのも忘れていましたし、暗くなっているのも忘れていました。それほど夢中になっていたのです。

『有り難う。良く判ったわ。教えてくれてありがとう。何でも良く知っているわねえ。もつと知りたいし、御礼にもつとおいしいものをご馳走してあげたいな。着いてこない？さつきのお菓子より、もつともつとおいしいわよ。』子供達の口の中につばが一杯溜まってきました。皆はその女の人の後について、その場所を離れました。あたりはずつかり暗くなっていました。

まったく辺りは暗くなり子供達が帰って来ないと村は騒ぎとなりました。村の道に寄り集まって、相談の結果、村人総出で、板切れを叩きながら大声で叫びながら、捜し歩こうと言う事になりました。板を叩く音と名前を叫ぶ大きな声が、あちこちの谷筋から木霊しました。そんなことが続いた夜半に、子供達が、ポカンとした顔をして、村のはずれの畑の傍の道に並んで立っているのが見付かりました。無事な子を見つけて泣きつく親、しかる親、安堵の声を上げる村人、いろんな声が混じりあいました。

板切れを叩く音や大声は直に谷から消えました。村人は道のふちの焚き火の傍で、見つけた子供達を見ておどろきました。子供達は、口に木の葉を銜え、口の周りには、木の葉のかけらをたくさん付けていたのです。

『こりやあ、お前ら、何食つとつた？……………』

『……………』

『こりや、何食つとつたんじやと聞いとるんじやがな……………』

『うん。うまいもんな、おぼちやんが呉れたと。』

『何処でえな、どんなもんをな……………』

『あつち。うめえもん、いつえ。』

一人の子供が、半べそかまながら、狐の穴のある谷の方を指差しました。

『あはたれらアが、木の葉を食わされとつたんじや。狐の仕業じや。』

『ばかもんじや。あれほど教えたらあがな。晩方になったら、早よう戻れ。知らん人からは物貰うな。口利くなども教えようがな。何も判つとらん。』

焚き火は消され、やがて村の夜は何時と同じ静けさに戻ったのですが、翌朝、幾人かの村人は、昨夜遅くに殊のほか良く響く狐の鳴き声が聞こえたというものが居ました。それを狐が笑っているのだとも言いました。

でもその後、子供達は、お寺の鐘の音を合図に外で遊ぶ事を止めましたし、狐が子供をだます事も無くなったそうです。

『暗くならないうちに子供は家にお帰り！』

『知らない人からは物をもらつたり、話をしないように！』

額面どおりの解釈よりも、その裏にあるもの、何時の時代も僅かな心無いものためにこのような断が生まれ、人を疑う警戒心を植えつけてしまう事を繰り返していたことのほうが悲しい。

〔あとがき〕

何時の時代でも繰り返さる事多しの思い。人でなく、狐としたところに、山村の岩崎に即した断。

区民の話を元に構成する。

岩崎昔話

④ 嫁殺しの田んぼ

伊佐に「嫁殺しの田んぼ」と言われる田ありと言う。その名の由来美話にして、言葉心して用うべしと論さるる也と岩崎に伝わると伝う聞く。

昔の事であると言うだけで、何時の時代の事なのかは知る術も無いことあります。

伊佐の農家に、きれいな心優しい嫁が他所から嫁いで出来たと言う噂を聞いて、岩崎でも、どんな嫁なんだと噂になってそうです。

その嫁に、腰を痛めていた姑は朝食時に言いました。

『今日は、都合で誰も行けんし、あそこの田んぼの田植えして、早よう帰つて来ておくれ。苗は昨日、わし等がばら撒いといたで、頼むで。』

朝食の後片付けもそこそこに、握り飯と漬物とを竹の皮に包み、飼い犬の『治郎兵衛』を連れて、嫁は田植えに出掛けました。未だ、嫁いで間の無い嫁ははつきりと場所も知りませんし、懐いている飼い犬の『治郎兵衛』が道案内みたいなものでした。

田に着くと、苗の束が一面にばら撒かれており、広い面積でしたが、嫁は百姓仕事の多少の心得があつたとは言ふものの、一人でどの程度がこなせるのかなど知る由も無かつたので、何も考えず、植え始めました。腰を屈め、水面を見つめながら、一心に植え続けました。昼飯もそこそこに一心に植えました。お母さんは『植えて、早く戻れ。』とおっしゃつたと、それはそれは一生懸命に植え続けました。連れてきた犬の『治郎兵衛』までもが、苗が不足しているのに気付くと、衝えて運んでくれたそうです。

日が西に傾き、やがて小田の山に沈みました。当たりが暗くなつた時、嫁は初めて後どれほど残っているのだろうかと思つたのです。顔を上げて見回しましたが、辺りは暗くて分かりませんので、若嫁は田んぼから出て、畦を歩いて調べました。未だ植えなければ成らない面積の広さはとても広かつたのです。驚きと暗さの不安が襲う同時に、嫁は氣を失い、田んぼに倒れてしまいました。

帰りが遅いと迎えに向かつていた婿は、『治郎兵衛』の悲しそうな泣き声を聞き、胸騒ぎを覚えたそうです。走り始めていたそうです。

かわいそうに嫁は泥の中に顔を突っ込んだままの姿で見付けられたのだそうです。『治郎兵衛』は傍に座り込んでいたそうです。

あれほど一生懸命に植えたのに、未だ、こんなに残っているか。お母さんは、植えて早く帰れと言われたのに、なんと言う事かと驚くと同時に、余りにも一生懸命に一日中、下を向いて働いていたので、目眩がして気を失ったのでしよう。

かわいそうな事をしたと家の人々は嘆き悲しみました。その後、その田んぼを周りの人は、「嫁殺しの田んぼ」と言つて、戒めたそうです。姑は、『田植えはそこそこにして、家に早く帰つてくるように、……。』と言つたつもりだったのだそうです。

〔あとがき〕

この話が表話だぞ、と言つて、岩崎に伝わっているのは、言葉使いに心せよとの戒めと
思います。使い慣れた言葉だからこそ簡単に使うが、ほんの少しの違いでとんでもない間
違いと成る事を教えていると思います。

区民から聞いた話を元に構成したものです。

岩崎昔話

⑤ 蛇婿

昔々の事です。岩崎のある家に、とてもきれいな娘さんが居りました。ところが一人娘であつたので、親達は早くお婿さんをと考えていたのです。その頃の岩崎では、誰もが野良仕事で生活しておりましたから、その娘さんも畑や田んぼで、家の皆んなと仕事をしたり、あるいは一人で仕事をするのは当たり前の事でした。

ある年の春の日、桜も咲いて、今日は暖かくなるなど言う天気の良い朝の事です。

『ああ、今日は日和も良いし、温かくなりそうだから、畑の草も大きくなっているし、お前は、坂の畑の草をこそつておくれ。われらは残っている耕作りに仕事を片付けに行つて来るでな、……。』

父親と母親はそう言うと、母は『負い素』と二人分の弁当を、父親は『さす』と杖を担いで家を出て行きました。娘もその後を追うように、鍬を担ぎ、お昼の弁当を下げて家を出ると別の方向に向いました。

天気は良くて、こそつた草はすぐに萎れるし、仕事ははかどりしました。お日様が頭の上に来て、娘は畑の畔に腰を下ろし、昼の弁当を一人で食べました。天気は良くて、気持ち良い風が吹き、鳥が遠くや近くで鳴き、満腹になった娘は寝転んで雲の流れを見ているうちに、ついウトウトと寝込んでしまいました。暖かく、気持ちよい風は、むすめや畑の草の上を吹いていました。

どれ位経つたのでしょうか。娘がふと目を覚ますと、傍に、誰かが立っていたのです。娘はとても驚きましたが、目を擦りながら、良く見ると、面長で目鼻立ちの通つたそれは男前の若者ではありませんか。娘は知らない男である事にも驚きましたが、その男前に驚きましたが、すぐ一目惚れしてしまつたそうです。二人は少しずつ話をするうちに打ち解け、やがて話は弾み、婿を探しているという会話になり、

『わしは次男坊。いずれ何処かに婿にでも行くか、それとも独り立ちして、嫁をもらうかしなければ成らない身分です。』これは願つても無い話だと娘は思いました。話しているうちにとても気立ては優しそうだし、働き者のようだ。この人なら一生添い遂げられそうだと思つたのです。その日はそこで別れ、夜、食事を食べながら今日の事を話すと、

『お前がそう言うのであれば、願つても無い事。』親達はとても喜びました。次の日も良い天気で、娘は残っている仕事をする為に畑に行きました。その子は

昨日の男は居ませんでしたが、早く片付けようと早速草をこぞり始めました。風は温かく吹いて気持ちの暖かきです。働いていると額に汗がにじんでくるのですが、娘は一生懸命に働きました。お昼の弁当を食べて、あたりを眺めていると、誰かがこちらに向って来るのが遠くに見えましたがすぐ昨日の男だと娘には判りました。間違いなく昨日の男でした。

男は近付くと、挨拶もそこそこに、打ち解けたように隣に腰を下ろし、話し始めました。二人はいろんなことを話しましたが、娘が思い切つて、婿になってくれないかと切り出すと、男は二つ返事で了解してくれたそうです。二人は早速家に帰り、親達に引き合わせたところ、家の者も気に入り、婿入りの日取りもすぐに決まりました。

婿入りの式が済み、婿は良く働き、幸せな毎日が過ぎました。しかしその後、日が経つに連れ、娘は少しずつ体の調子を崩すようになり、やがて寝込む事が多くなりました。家の者や近くの家の人達も案じるようになって来ました。皆で相談した結果、

『丁度良い。隣村に旅の易者が逗留しておられるそうじゃから、観てもらおう。』という事になり、早速見立ててもらいましたところ、

『お前さんの村の峠の上には古い大きな松ノ木が有るはずじゃ。その松の大木には、毎年鷹が巣を作る。今年も巣をつくり卵が今二つある。その鷹の卵を娘に飲まれる事じゃ。たちまち直る。．．．ああ、其れで、卵は婿に取りに行かせなされよ。』

『良くご存じで、はい、今年も巣を掛けております。早速明朝、婿に取りに生かします。有り難うございました。』父親と母親と隣の家のお爺さんは、いい事を教えていただいた、あの易者は見たことも無い峠の松をご存知だ、不思議な事だ等と言いながら、家に帰り、そのことを婿に話すと、嫁の為、鷹の卵は自分が取に行くと言いました。

翌朝も良い天気でした。婿は卵を採りに行くと言つて、家を出て行きました。途中から見ると確かに鷹が飛んでおり、峠の下からは松ノ木に巣を作っているのが見えました。峠の大きな松ノ木までたどり着くにはそれほど時間はかかりませんでした。根元にたどり着いて、ちよつと、婿は困つたのです。と浮くからは見ていましたが、松を近くから見るのは初めてだったのです。松ノ木はとても太い上に、一の枝がとても高いのです。どう考えても、簡単に登れそうにありません。婿は思案しました。ところが、婿は辺りを見回すと、驚いた事に、体をくねらせ始めると、見る見るうちに大蛇に変身し始めたのです。それから、どうです。口から赤い先の裂けた舌を振るわせながら、するすると松ノ木を登

つていくではありませんか。そうです。婿は大蛇の化身だったのです。ですから、好物の鷹の卵と聞いて、居ても立つても居られず、朝早くからでかけてきたのです。そして好物の鳥のしかも鷹の卵を食べたいが一心で、今大蛇に戻ったのです。大蛇はするすると松ノ木を這い上がって行きました。松の根元には着ていたきものが落ちていました。

ところが、巢の近くまで上ると驚いた事に見たことも無い大きな鷹が口を開けて待ち構えていたのです。二羽とも居ました。卵を食べたいが一心でしたので、つい巢に近づきすぎたときです。一羽の鷹が、隙を見て大蛇の片方の眼をつつきましたところ、すぐさま、もう一羽が反対の眼をつついたのです。もう大蛇は動けません。鷹は好物の大蛇を殺してすぐに食べてしまいました。

とても大きな木だから、婿は梶子摺って難儀しているのだらうと家の者達は考えていました。夕方までには帰っているのだらうと昼ごはんを食べながら話をしていましたが、夜になっても帰ってきませんでした。不安になって父親や母親と一緒に易者に会いに付いて行ってくれた隣のお爺さんに相談した結果、探しに行く事になりました。暗がりの中に、峠に向かう三個の提燈の明かりがありました。

夜が明けて、噂を聞きつけ心配した村人が峠の上の松の大木の根元に集まり、辺り一面をくまなく探しましたが、昨日の夜、三人が持ち帰った着物の他には、何も見つかりませんでした。村では婿は神隠しに合ったのだらうという事になったそうです。家の者は悲しみましたが、娘は日ごとに元気になったそうです。

易者は化身が鳥の卵が好物で、卵の主は蛇が好物だということを知っていたということでしょう。これは、裏には裏ありの教えでしょうか。

〔あとがき〕岩崎では、女子は野良で昼寝などするものではない。してはいけないとたしなめる為はこのような話をして聞かせたそうです。易者は婿が大蛇の化身である事を見抜いた上で、好物の鷹の卵と言え、喜んで取りに行くだらう。だが鷹の夫婦は、卵を守る為には好物の大蛇を間違ひなく、殺して骨までも食べてしまい、何一つ残さないであらうということを知っていたのです。

区民の話を元に構成する。

岩崎昔話

⑥ 山ノ神

岩崎の村の奥に山ノ神さんと呼んで、そこに映えている木の枝一本といえども持ち帰っては成らないといわれて居る場所があります。ご神体はソーセイジのように、茶色の表面がつるつるの細長い石が、たくさん束ねたように重なって立ち並んでいるものです。その山の神さんにまつわる話です。

もうずっと、ずっと昔のことですが、岩崎のある家の子供が突然病で亡くなったそうです。家の者達はとてまかわいかった子供の突然の死をとてま中しみました。昔の農村では、川や山の石を拾ってきて土葬の上においてお墓とするのが当たり前でしたから、嘆き悲しんだ母親は一人でお墓を作ったそうです。ところが、その後母親は、重い病に罹って、寝込んでしまったのだそうです。

『あれほど、目に入れても痛くないほど可愛がっていたのだから、……。』

『ほんとに無理も無い。見るのもつらい。……。』

『こないだも会いに行つたけど、やつれようを見るとかわいそうで、……。』

と、村人は口々に囁きあいました。父親は春五月を一人でこなす為朝早くから夜遅くまで働かなければなりませんでしたが、寝込んだ嫁の世話もしなければ成りませんでした。それでも父親は「ゆみ」が明ける日に墓に出掛けました。そこには、母親が立てた墓石がありました。その石が山ノ神産のものであることにすぐに気付きました。父親は、持ってきた手桶の水で丁寧にその石を洗い、腰紐で背負うと、

『南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。……。』

と唱えながら、山ノ神さんに上つて行き、丁寧にお詫びを述べ、お返ししたそうです。そして帰り道に手ごろな石を見つけ、墓としました。

それから、日が経つにつれ、母親は少しづつ回復し、食事の支度が手伝うようになり、そしてついには、野良仕事ができるまでの元の体と心に回復したということでした。

こんな事があつてから、岩崎では、山ノ神さんの場所は、意思是勿論の事、草一株、枝一本といえども持ち帰ってはならないのだという事になったのだそうです。

〔あとがき〕

山ノ神さんの石の格好を見ると水で削られたように角が無く、細長い形をしており、珍しいのですが、今では崩れて、ほらほらに崩れているとの事です。

阿弥陀の教え

昔の事と言つても、余り古い話ではなく、江戸時代の少し前に実際にあつた話だそうです。

ある家で、仏壇に、御仏飯をお供えに行くと、御掛軸が無くなつていたので、家中大騒ぎになつたの言うまでもありません。

村の家々では、御飯が炊き上がる度に、まず最初に、仏壇に御仏飯をお供えしてから、その後で食事をするのが当たり前のことで、また、お下がりも当主が戴くのが慣わしで、今でも家によつては、習慣として受け継がれています。

その家は大騒ぎになりましたが、よく考えても、なぜ、御掛軸の阿弥陀様が、消えたのか判らず、お寺にも相談しました。

御掛軸は、そもそも本山から貰い受けるものであるので、本山に出向き、改めていただくのが良からうということ成つたそうです。

大切にしている御掛軸が無くなつたのですから、主は取るものも取あえず、京都の本山に出向く事になつたそうです。

当時は今と違い、歩いての京都行きですから、大変な事だつたのです。お寺の手紙を懐に、宿賃の米を背負い、幾足かの草鞋を腰に主は、暗いうちに家を出て、一日中歩いては、一夜の宿を民家に頼みながら、本山にたどり着いて、お寺からの手紙を渡し、御掛軸が戴けるようお願いしますと、応対に出た僧侶は、寺からの手紙を読み終え、

『ここではゆつくり話も出来ませんので、……』と、別室に誘い、旅の労を労つた後で、改めて、手紙を読み返した老僧は、

『阿弥陀様をお渡しする事は叶いませぬな。家で何があつたか、ご存じない模様ゆえ、帰られてから、女房殿に質されるが良からう。……。お宅の阿弥陀様は、のぼり坂の上においでだが、家中、心致さぬ限り、お迎えしても、御留まりなさる事は無いでしょう、……。』主は疲れも吹っ飛ぶほど驚き、

『家内が何か粗相を致しましたので、……?』

『それは、帰られてから、女房殿にお聞きなされ。ついの心の緩みを御諭しゆえ。以後家中一同心なされるが宜しいかと、……。』

主は丁重に札を述べ、御影堂と阿弥陀堂に再度のお参りをして帰途に着いたのですが、帰る道すがら、

「何を家内はしでかしたのか。きつと粗相をしでかしたに違いない。馬鹿者が、……。それにしても良かった、阿弥陀様は、のぼり坂の上の大松の袂においでだという事が判つただけでも有り難い。帰つた脚でお迎えに行こ

う。……………あの馬鹿が……………」

帰り道と行き同じ家で泊をしましたが、本山参りということで済ましてしまったので、事の詳細なぞ恥ずかしくて話すことなど出来なかったのです。

主は村に着くと、家を通り過ぎ、のぼり坂に向かった。坂の頂上にたどり着き、あたりを探したが、幾本もの大松がありましたので、見つかりません。そこから尾根伝いに探しながら登った所の大きな松の根元に、やつと御掛軸はあったのです。

両手を合わせて丁寧に御辞儀をし、思わず、許しのお詫びの声を口にした主は、懐から取り出した藪くちやな風呂敷でお掛軸を包みました。

主は家に入ると家の者には声も掛けずに、一目散で仏壇に向かつて駆け上がり、懐から先程の御掛軸を取り出すと、丁重に、収めてから、幾度も幾度も『南無阿弥陀仏』と御妙号を唱えた。

その後、主が、寺の住職に明かした内容によれば、事件の日の朝、腹を空かした子が、飯の炊き上がるのが待てずに、余りにも大声で泣き喚くものだから、母親は、つい、炊き上がった飯を蒸らす暇も無く、握りを一つ作り、我が子に与えてしまい、蒸れ上がってから、御仏飯を盛り付け、お供えたのだそうです。些細な事ですから、そのとき、母親は阿弥陀様は許してくださるに違いないと思っただろうかは判りませんが、泣き止んで欲しい、の一念のことであったのかも判りませんが、また、本当に今回の一度だけだったのかも定かではありませんが、こんな噂が伝わっているのも、先祖を敬う心は一時たりとも疎かにしては成らぬ、その心の想いの頭れである御仏飯をお供えするという行動を疎かにしたことを諭したものなのか、あるいはまた、その想い親が破つて子に見せた事を諭したものなのかは判断する由もありませんが、今でも村の檀家では、習慣のように母から嫁へと、その役目は受け継がれて続いております。

〔あとがき〕

終戦の頃生まれた者は、平均的に百万人の祖先が居るとか、その一人が欠けていても存在しなかったことを考えてみるのも、如何でしょうか。

なお、此処に言う『のぼり坂』は、通称『坂』と呼んでおり、出石街道の当地区と呉れ坂地の区境にある。予断で在るが、秀吉軍の但馬攻めの折、竹田城を三日で落とし他後の宮田での指示に依れば、「のぼり坂に至らず出石に赴く。」と在るそうで、当地区は兵役や兵料米の抛出などを免れたであろうことを喜んだであろうと思う、千人居ても十石の米が一日に食い尽くしたのでありますから。